

哲学とは～現象学的哲学史廻行～

パート1 <ギリシャ哲学の変遷>

- 0、はじめに
- 1、哲学とは
- 2、哲学はもはや不要か
- 3、ギリシャ悲劇～アリストテレス
- 4、プラトンの意義 ↓パート1
- 5、「主観-客観」論争
- 6、フッサールの現象学へ
- 7、おわりに

0、はじめに

◇来週パート2やります！

哲学とは？

⇒ひとつの答え「普遍性を追求する学問」・・・古代ギリシャから

- ・ギリシャ悲劇 ≡ 構造主義
- ・プラトン ≡ フッサール
- ・イデア ≡ 共通項

※政研名物「漂流」

1、哲学とは

●哲学・・・『哲』を学ぶ？学問？ナンコッチャ？

⇒「philosophy」＝「愛知学」

Cf.「機械人形」になるか「苦悩の生」を生き抜くか

1、Yahoo!辞書から

【哲学】【意】《philosophy の訳語。ギリシア語の philosophia に由来し、「sophia (智) を philein (愛する)」という意。西周(にしあまね)が賢哲を愛し希求する意味で「希哲学」の訳語を造語したが、のち「哲学」に改めた》

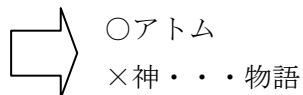
1 世界・人生などの根本原理を追求する学問。古代ギリシアでは学問一般として自然を含む多くの対象を包括していたが、のち諸学が分化・独立することによって、その対象領域が限定されていった。しかし、知識の体系としての諸学の根底をなすという性格は常に失われない。認識論・論理学・存在論・倫理学・美学などの領域を含む。

2 各人の経験に基づく人生観や世界観。また、物事を統一的に把握する理念。「仕事に対しての-をもつ」「人生-」

2、竹田青嗣

「哲学とは推論を限界まで進める学問である」(竹田 1993)

Ex. 世界のアルケー (原理)



● 哲学の始まり・・・ギリシャ悲劇時代 (ニーチェ)

△ 「世界の不思議」(「本質存在」ハイデガー) の解明

Ex. タレス (BC624～BC546) 「世界の原理は水である」

☆ 哲学は人間が行う学問である

⇒ 人間がどのように世界を把握しているか

Cf. 動物になくて人間にあるもの・・・形而上的思考 ex. 「死」「始原」等

2、哲学はもはや不要なのか

◇ 近代の産業革命⇒科学の登場 cf. 科学；仮説→実験→論証

△ 現代＝科学至上主義・・・構造主義

But 科学は「世界の成り立ち」(あるがままの世界)を示すが「いかに生きるか」(価値判断の方法)は示さない⇒哲学の意義！(岩崎 1966)

3、哲学史；ギリシャ悲劇時代～アリストテレス

▲ ギリシャ悲劇時代

「存在への純粋な驚き」・・・「事実存在」(ハイデガー)

<ギリシャ悲劇時代哲学者>

タレス	(BC624～BC546)	世界の原理は水である
ピュタゴラス	(BC582～BC496)	世界の原理は数である
ヘラクレイトス	(BC540～BC480)	世界の原理は万物流動である
デモクリトス	(BC460～BC360)	世界の原理はアトムである

世界の原理を捉えようとする・・・世界そのものには秩序がある



●ソクラテス (BC469～BC399)

世界を人間がどのように捉えるかを捉えようとする・・・世界でなく人間の認識に秩序がある
⇒世界それ自体に意味秩序はなく、「心」の原理が秩序を恣意的に創りだしている ex. 「善」

△ニーチェ/ソシュールの言語論転換的発想

「知性によって世界を把握する」・・・「本質存在」(ハイデガー)

Cf. 毒杯事件・・・肉体より魂の優位性を証明する

△「世界の本質とはなんであるか」 cf. 問答法→知の産婆術としての「無知の知」

Ex. 鉛筆が「鉛筆」として、まさにそれであるところのものが存在することを強く示唆するものとは？

→(「鉛筆」の本質とは何か?)・・・アイデアの原型

●プラトン (BC427～BC347)

アイデア論・・・形而上学の源泉←俗な見方

△「この世のもの」と「この世ならぬもの」の分節⇒「この世」の軽視

アイデア：本質観取 ex. 「美しい」=桜・猫・野球・水嶋ヒロ(既婚) etc

Cf. アイデアのアイデア = 「善」のアイデア

●アリストテレス (BC384～BC322)

「原因—結果」究明(アイデア論の応用)・・・個々の事物に「最高善」が宿る

△ギリシャ哲学のプラトンからの引き戻し

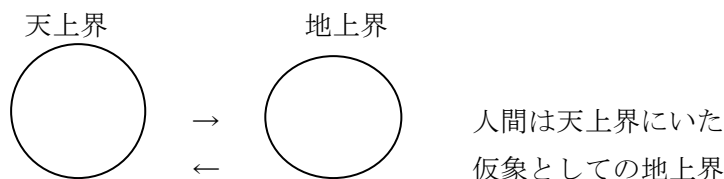
「最高善=究極の原因」 cf. 「究極の原因=神」・・・中世神学

Cf. 4つの原因

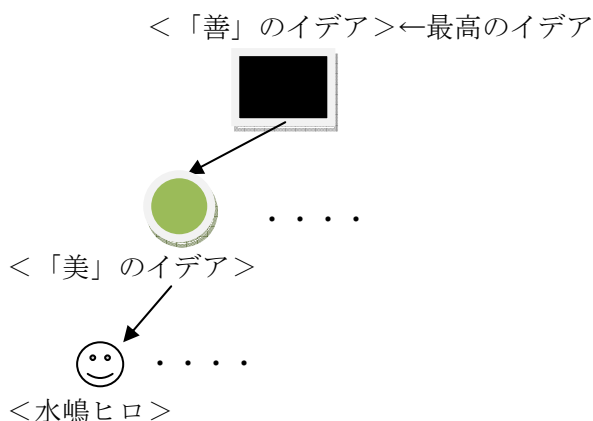
質量因	どのような物質から生まれるのか
始動因	変化のきっかけは何か
形相因	本質はなにか
目的因	目的はなにか

4、プラトンの意義

◆アイデアとは?・・・プラトン思想の理解



プラトンのアイデア体系



◆プラトニック・ラブ・・・プラトン思想の典型例

恋愛の経緯・・・「外的な美しさ」⇒「内面(魂)の美しさ」

Ex. 「二頭の馬」・・・「天上的エロス」と「地上的」エロス

↑相手をうやまう ↑相手を我がものとする

・人間のエロスの欲望；千差万別 「蓼食う虫も好き好き」

But 「超越性」(「ほんとうのもの」)を求めるといふ点では共通点をもつ→普遍性

Cf. 『美』とは議論によってはわからないが、『美』は議論によってしか生じない(カント)

◇反ソフィストとしてのプラトンの意義

ソフィスト；弁論術を教える集団⇒哲学が「言葉遊びの学問」になってしまう

Ex. パラドクスの追求「アキレスと亀」・・・アキレスは亀には決して追いつけない
⇒哲学の意義の回復＝「普遍性」の追求を目指す

Cf. プラトンのアイデア説の目的＝「善き」政治という目標を定めるため

※「善き」政治のための手段は時風に応じて臨機応変にすべき

「プラトンが語ろうとしているのは、いかにすれば、(略)多様性が最善の仕方組織されうるかということである。理想国家とは、国民の本来の多様性が最大限許容され、個々人の持つ個別的 가능성이最も自由に、最も十全に発揮しうることを保障する機構にほかならない。」(小熊ほか 1985)

5、フッサールの問題意識：「主観—客観」論争の克服

近代哲学・・・神学との決別（エポケー）と踏襲（真理概念）

⇒「真理（なるもの）」の探究＝「主観（人間の認識）—客観（真理）」の一致

●デカルト（1596～1650）「神の存在証明」・・・「方法的」懐疑

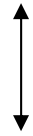
⇒「『神』がいなければ人間は『主観—客観』は一致しない（逆説的証明）」



△人間は「不完全」であるが、「完全」という概念をもっている。
それは「完全」なる「神」が与えたものであるに違いない。

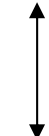
●カント（1724～1804）「世界二分論」（観念世界/経験世界）・・・批判哲学

⇒「客観（＝真理＝観念世界）は人間（主観）には認識不可」



●ヘーゲル（1770～1831）「絶対精神」

⇒「人間はいずれ客観世界を認識できる」⇒絶対的絶対主義



●ニーチェ（1844～1900）「道徳批判」

⇒「客観などない。ただ解釈があるのみだ」・・・「力への意思」⇒絶対的相対主義者

⇒●フッサール（1859～1938）

竹田 1993 p.69 図参照

6、フッサールの現象学へ

フッサール>プラトン= (ヘーゲル+ニーチェ) ÷ 2

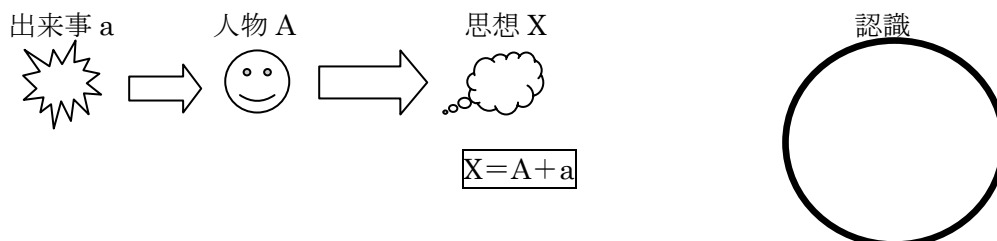
◆現象学とは？

- 1 「主観—客観」の一致は不可能であるという前提に立つ
- 2 「方法的」懐疑の立場をあえて取る(独我論) ←認識は独我論からしか出発できない
- 3 認識のなかに含まれる「真理の性格」、「イデア的なもの」、「普遍的なものに属しているもの」を看取 detect する
「個別的なものの中に普遍性を(略)直観的に把握し、そして表象作用を反復することによって概念的志向の同一性を確認する能力は、認識の可能性のための前提である。」(フッサール『論研』)
- 4 「正しい」認識ではなく、「妥当な」認識があるのみである
△相互的確信一致(真偽ではなく関係性を重視)
- 5 4が成立する一般条件とその構造について考えることができるだけだ
「学問的認識とは根拠からの認識である。何かの根拠を認識ということは、しかしかの事態であるということの必然性を洞察することである。」(フッサール『論研』)

☆環境条件は偶然的であるが、出力行動は必然的である
⇒普遍性の現象学的還元

- ・事物=それ自体では単独でありえない
 - ・認識主体=他のものとの関係性のなかにある
 - ・認識=ほかのものとの関係性のなかで可能となる
- 「関係が(略)関係に(略)関係する」(キルケゴール『死に至る病』)*

●普遍性の現象学的還元



☆ある出来事により、ある思想が生まれる・・・各人が共通でもっているものが前提
例「講演会の講師選定」

α「人気のある講師を呼んで集客を増やすべきだ」

β「専門性の高い講師を招いて質を上げるべきだ」

⇒普遍性観取・・・「より良い講演会にしたい」

7、おわりに

●現象学批判1・・・「独我論に陥っている」

⇒あえて独我論的立場（「方法的」懐疑）からはじめているだけで、その批判は見当違い

●現象学批判2・・・「真理」を目指す、時代遅れな学問である

⇒上記のように、いかに「真理」などというものが存在しないのかを現したのが現象学であり、この批判も的外れである

△構造主義を超えて・・・構造主義+普遍性の現象学的還元=現象学>構造主義

◇私見1、なぜ現象学か

⇒構造主義の閉塞性（絶対的相対主義志向）打破の可能性の探究

◇私見2、現象学の現代的意義

⇒グローバル化する社会・・・共通理解の必要性

☆今こそフッサール（=現象学≒プラトン）である

<参考文献>

- 立松弘孝編『フッサール・セレクション』平凡社ライブラリー 2009年
フリードリッヒ・ニーチェ『世界の名著 ニーチェ』中央公論社 1966年
リー・スピックス『フリードリッヒ・ニーチェ』青土社 2006年
村井則夫『ニーチェ ツァラトウストラの謎』中公新書 2008年
竹田青嗣『ニーチェ入門』ちくま新書 1994年
ー 『自分を知るための哲学入門』ちくま学芸文庫 1993年
ー 『現象学入門』NHKブックス 1989年
ー 『プラトン入門』
ー 『現象学は<思考の原理>である』ちくま新書 2004年
ー /西研『はじめての哲学史』有斐閣アルマ 1998年
永井均『これがニーチェだ』講談社新書 1998年
岩崎武雄『哲学のすすめ』講談社現代新書 1966年
木田元『反哲学入門』新潮社 2007年
ー 『ハイデガーの思想』岩波新書 1993年
小熊勢記ほか『西洋倫理思想の形成 I』晃洋書房 1985年
中谷猛ほか『概説西洋政治思想史』ミネルヴァ書房 1994年
貫成人『図解雑学』ナツメ社 2008年
ユクスキュル/クリサート『生物から見た世界』岩波文庫 2005年
セーレン・キルケゴール『死に至る病』岩波文庫